

資 料

人口変動と世帯構造

—山形県—農村の事例—

清水浩昭・池ノ上正子

1. はじめに

小稿では、昭和60年に山形県—農村で実施した調査結果に基づいて人口変動と世帯構造およびその構造的変化との関連を時間軸（年次）と年齢軸（世帯主の世代）とを指標にして検討してみたい¹⁾。

というのは、「直系家族制」を基本とする社会における世帯変動の構造は、時間的变化よりもむしろ現世帯主世代と前世帯主世代の年齢差とそこに生起する人口事象とが適合的に連関して惹起しているように思えてならないからである²⁾。

表1 世帯構成の推移（一般的動向）

年 次	普通世帯	核 家 族 世 帯					非親族 世 帯	単 独 世 帯	その他の 親族世帯
		小 計	夫婦のみ の世帯	夫婦と子 供からな る世帯	男親と子 供からな る世帯	女親と子 供からな る世帯			
昭和30年	17,383,321	59.6	6.8	43.1	1.6	8.1	0.5	3.4	36.5
35	19,678,263	60.2	8.3	43.4	1.3	7.3	0.4	4.7	34.7
40	23,085,393	62.6	9.9	45.4	1.0	6.3	0.4	7.8	29.2
45	26,856,356	63.5	11.0	46.1	0.9	5.5	0.4	10.8	25.4
50	31,270,506	63.9	12.4	45.7	0.8	5.0	0.2	13.5	22.3
55	34,105,958	63.3	13.0	44.2	0.9	5.1	0.2	15.8	20.7
60	36,478,289	62.5	14.3	41.6	1.0	5.6	0.2	17.5	19.8

資料) 総務庁統計局「国勢調査」

1) 本資料は、清水浩昭、「人口変動と世帯構成の変化—山形県—農村の事例を中心として—」、『人口問題研究』、第185号の続稿である。

2) ピーター・ラスレットによれば、世帯の歴史に関して5つの誤った概念があるという。そのなかで、本資料にかかわる部分を紹介すると「まず第1は、ヨーロッパおよびおそらく他に地域においても、工業化以前の過去においては、同居家内集団は常に大規模でありかつ親族構成は複雑であった、という誤った考えである。われわれは、これを大規模世帯ドグマとよぼう。第2の誤った概念は、そうした集団の規模と構造に時の経過とともに起る変化が、いつでもどこでも常に大規模から小規模へ、複雑なものから単純なものへという変化であった、というものである。われわれは、これを一方向ドグマとよぼう。第3は、工業化あるいは『近代化』の過程が、いつでもどこでもこの一方向ドグマにそった変化をともなってきた、という誤った仮定である。われわれは、これを工業化ドグマとよぼう」(ピーター・ラスレット、「日本からみたヨーロッパの世帯とその歴史」、斎藤修編著、ピーター・ラスレット他著、『家族と人口の歴史社会学』〔社会科学の冒険8〕、リプロポート、1988年、pp.28-29)となっている。

2. 世帯構成の変化

わが国の世帯構成の推移をみると、昭和35年以降の「核家族的世帯化」³⁾は著しいものがある。(表1参照)。

このような状況を念頭において山形県安楽城ムラの世帯構成をみると、昭和30年代後半、とりわけ40年代から「核家族世帯」率は上昇するが、50年代に至ると低下傾向を示すことになる。しかし、「核

表2 世帯構成の推移

年次	総数	核 家 族 世 帯					単 独 世 帯	その他の 親族世帯
		小 計	夫婦のみ	夫婦と子供	男親と子供	女親と子供		
昭和30年	36(100.0)	6(16.7)	—	4(11.1)	—	2(5.6)	—	30(83.3)
31	36(100.0)	6(16.7)	—	4(11.1)	—	2(5.6)	—	30(83.3)
32	36(100.0)	5(13.9)	—	4(11.1)	—	1(2.8)	—	31(86.1)
33	37(100.0)	6(16.2)	—	5(13.5)	—	1(2.7)	—	31(83.8)
34	37(100.0)	6(16.2)	—	5(13.5)	—	1(2.7)	—	31(83.8)
35	37(100.0)	5(13.5)	—	5(13.5)	—	—	—	32(86.5)
36	37(100.0)	6(16.2)	—	6(16.2)	—	—	—	31(83.8)
37	37(100.0)	7(18.9)	—	7(18.9)	—	—	—	30(81.1)
38	37(100.0)	8(21.6)	—	7(18.9)	1(2.7)	—	—	29(78.4)
39	38(100.0)	9(23.7)	—	8(21.1)	1(2.6)	—	—	29(76.3)
40	38(100.0)	8(21.1)	—	7(18.4)	1(2.6)	—	—	30(79.0)
41	38(100.0)	7(18.4)	—	6(15.8)	1(2.6)	—	—	31(81.6)
42	38(100.0)	8(21.1)	—	6(15.8)	1(2.6)	—	—	31(81.6)
43	38(100.0)	9(23.7)	—	8(21.1)	1(2.6)	—	—	29(76.3)
44	38(100.0)	10(26.3)	—	9(23.7)	1(2.6)	—	—	28(73.7)
45	38(100.0)	11(29.0)	—	10(26.3)	1(2.6)	—	—	27(71.1)
46	38(100.0)	11(29.0)	1(2.6)	9(23.7)	1(2.6)	—	—	27(71.1)
47	38(100.0)	12(31.6)	1(2.6)	10(26.3)	1(2.6)	—	—	26(68.4)
48	38(100.0)	14(36.8)	1(2.6)	12(31.6)	1(2.6)	—	—	24(63.2)
49	38(100.0)	13(34.2)	2(5.3)	10(26.3)	1(2.6)	—	—	25(65.8)
50	38(100.0)	13(34.2)	3(7.9)	9(23.7)	1(2.6)	—	—	25(65.8)
51	38(100.0)	12(31.6)	2(5.3)	9(23.7)	1(2.6)	—	—	26(68.4)
52	38(100.0)	12(31.6)	2(5.3)	9(23.7)	1(2.6)	—	—	26(68.4)
53	38(100.0)	11(29.0)	2(5.3)	8(21.1)	1(2.6)	—	—	27(71.1)
54	38(100.0)	11(29.0)	2(5.3)	8(21.1)	1(2.6)	—	—	27(71.1)
55	38(100.0)	10(26.3)	3(7.9)	6(15.8)	1(2.6)	—	—	28(73.7)
56	38(100.0)	8(21.1)	3(7.9)	4(10.5)	1(2.6)	—	—	30(79.0)
57	38(100.0)	7(18.4)	3(7.9)	3(7.9)	1(2.6)	—	—	31(81.6)
58	38(100.0)	7(18.4)	3(7.9)	3(7.9)	1(2.6)	—	—	31(81.6)
59	38(100.0)	8(21.1)	4(10.5)	3(7.9)	1(2.6)	—	—	30(79.0)
60	38(100.0)	7(18.4)	4(10.5)	3(7.9)	—	—	1(2.6)	30(79.0)

3) 「核家族的世帯」(「核家族世帯」+「単独世帯」)の比率がだんだんと高まっていくこと。

「家族世帯」率が最も高いときでもその比率は約37%を示すにすぎない。したがって、このムラの世帯構成は、「その他の親族世帯」が常に優位にあるといえよう。

このムラの世帯構成をわが国の全体状況と比較すると、このムラでは、昭和40年代に一時的に低下した「その他の親族世帯」率が、その後再び上昇しはじめ今日においてはその比率が約80%に達している。そこに、このムラにおける世帯構成の特徴を見出すことができよう（表2参照）。

3. 世帯構成の変化の型 一年次および世帯主の世代との関連で—

ここでは、昭和30年から60年にかけて生じた世帯構成の変化型（「その他の親族世帯から核家族世帯への変化型」、「核家族世帯からその他の親族世帯への変化型」および「核家族世帯から単独世帯への変化型」）についてその変化が生じた時点（年次）とその時点における世帯主の世代を指標にして分析を試みることにしたい。

まず、年次からみると、昭和30年から50年においては、「その他の親族世帯から核家族世帯への変化型」が「核家族世帯からその他の親族世帯への変化型」を上回っている。ところが、昭和50年から60年においては、「核家族世帯からその他の親族世帯への変化型」が「その他の親族世帯から核家族世帯への変化型」を上回るに至っている（表3参照）。

この傾向は、わが国における「核家族化」の進展と著しい違いを示していることになる。

つぎに、これを世帯主の世代からみると、20代ないし30代が世帯主である世代においては、「核家族世帯からその他の親族世帯への変化型」が支配的であるのに対して、40代ないし50代においては、「その他の親族世帯から核家族世帯への変化型」が支配的である（表3参照）。

この結果をみると、世帯構成の変化の型は、歴史的、時間的影響よりむしろ世帯主の世代特徴によって顕在化しているように思えてならない。

そこで、このようなことを念頭において、かかる世帯構成の変化の型を人口学的要因との関連でみてみよう。

表3 年次別および世帯主の世代別世帯構成の変化の型

指 標	変 化 の 型			
	総 数	その他の親族世帯から核家族世帯への変化型	核家族世帯からその他の親族世帯への変化型	核家族世帯から単独世帯への変化型
総 数	27(100.0)	12(44.4)	14(51.9)	1(3.7)
昭和30~40年	6(100.0)	3(50.0)	3(50.0)	—
昭和40~50年	9(100.0)	6(66.7)	3(33.3)	—
昭和50~60年	12(100.0)	3(25.0)	8(66.7)	1(8.3)
20 代	12(100.0)	—	12(100.0)	—
30 代	2(100.0)	—	1(50.0)	1(50.0)
40 代	8(100.0)	7(87.5)	1(12.5)	—
50 代	5(100.0)	5(100.0)	—	—

表4 年次別および世帯主の世代別世帯構成の変化の要因

指 標	変 化 の 要 因			
	総 数	死 亡 (主に直系尊属)	転 入 (主に婚入)	転 出
総 数	27(100.0)	10(37.0)	14(51.9)	3(11.1)
昭和30~40年	6(100.0)	2(33.3)	3(50.0)	1(16.7)
昭和40~50年	9(100.0)	5(55.6)	3(33.3)	1(11.1)
昭和50~60年	12(100.0)	3(25.0)	8(66.7)	1(8.3)
20 代	12(100.0)	—	12(100.0)	—
30 代	2(100.0)	—	1(50.0)	1(50.0)
40 代	8(100.0)	6(75.0)	1(12.5)	1(12.5)
50 代	5(100.0)	4(80.0)	—	1(20.0)

4. 世帯構成の変化の型 —人口学的要因との関連で—

まず、年次別に世帯構成の変化をもたらした人口学的要因をみると、昭和30年から40年にかけては、「転入」が主で、「死亡」が副次的要因になっているのに対して、40年から50年については、「死亡」が主で、「転入」が副次的要因となっている。ところが、昭和50年から60年については、「転入」が70%を占めるに至っている（表4参照）。

つぎに、これを世帯主の世代でみると、20代ないし30代は、主に「転入」によって、40代ないし50代は、主に「死亡」によって世帯構成が変化している（表4参照）。

このような状況をふまえて、世帯構成の変化の型と人口学的要因との関連をみてみよう。

まず、「その他の親族世帯から核家族世帯への変化型」をみると、この変化型は、「死亡（主に直系尊属）」と「転出」、とりわけ「死亡」によってもたらされていることになる。

つぎに、「核家族世帯からその他の親族世帯への変化型」をみると、この型は、「転入（主に婚入）」、つまり、息子（ときには娘）の許に配偶者が「転入」し新しい夫婦関係が成立する。そのことによって「核家族世帯」が「その他の親族世帯」へと変化するというものである。

さらに、「核家族世帯から単独世帯への変化型」をみると、この型は、「男親と未婚の子供からなる二世帯世帯」であったものが、男親の老人ホームへの入所によって「単独世帯」（「未婚の息子のみの単独世帯」）に変化したものである。しかし、この変化型は、このムラにおいてもきわめて稀なケースである（表5参照）。

表5 世帯構成の変化の型別変化の要因（昭和30～60年）

変化の型	変化の要因			
	総数	死亡 (主に直系尊属)	転入 (主に婚入)	転出
総数	27 (100.0)	10 (37.0)	14 (51.9)	3 (11.1)
その他の親族世帯から核家族世帯への変化型	12 (100.0)	10 (83.3)	—	2 (16.7)
核家族世帯からその他の親族世帯への変化型	14 (100.0)	—	14 (100.0)	—
核家族世帯から単独世帯への変化型	1 (100.0)	—	—	1 (100.0)

かかる記述・分析をふまえて、さらに、この問題を追究してみたい。

ここでは、三つの世帯構成の変化型を具体的な事例分析を通じて検討することにした。

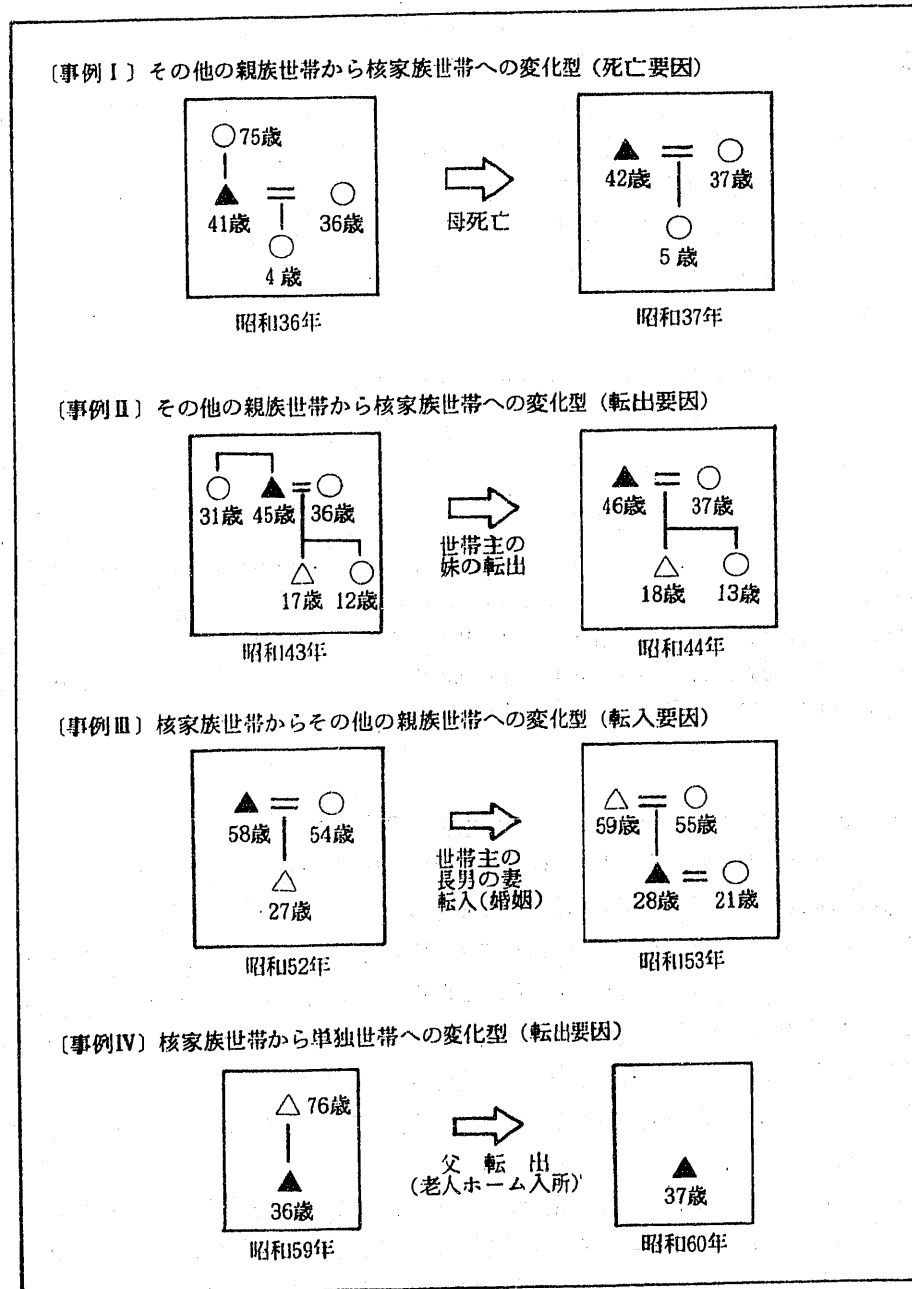
まず、「その他の親族世帯から核家族世帯への変化型」で、その変化が「死亡」によって生じたものをみると、〔事例Ⅰ〕のように、昭和36年時点で世帯主は、すでに40代に達しており、配偶者を失った母は70代後半になっている。したがって、昭和36年時点における世帯構成は「女親と子世代夫婦およびその子供からなる世帯」（「その他の親族世帯」）であった。ところが、翌年に母が「死亡」してしまったために、この世帯は、「核家族世帯」に変化するに至った。このようなことが、世帯主世代が40代ないし50代において「その他の親族世帯から核家族世帯への変化型」を顕在化せしめた潮流であるように思われる。

また、この変化型は「転出」によっても現出している。そこで、その例を〔事例Ⅱ〕でみてみよう。しかし、「転出」によるものは、必ずしも一般的な変動形態とはいえないように思われる。というのは、この世帯には、世帯主の妹、つまり、傍系親族が「同居」していたために「その他の親族世帯」を構成していた。ところが、この妹が「転出」することによって「核家族世帯」に変化したケースだからである。

つぎに、「核家族世帯からその他の親族世帯への変化型」で、その変化が「転入」によってもたらされたものを〔事例Ⅲ〕でみてみよう。〔事例Ⅲ〕をみると、昭和52年時点における世帯構成は、50代後半の世帯主と50代前半の配偶者および男の平均初婚年齢に近い息子とからなる「核家族世帯」であったが、53年にこの息子が配偶者を迎えるに至った（「転入」）。その結果、この世帯は「核家族世帯」から「その他の親族世帯」に変化することになった。「核家族世帯からその他の親族世帯への変化型」に20代ないし30代の世帯主世代が多いのは、このためである。

さらに、「核家族世帯から単独世帯への変化型」について触れなければならないが、前述した通りであるので省略することにしたい（図1参照）。

図1 世帯構成の変化の型（典型的な事例）



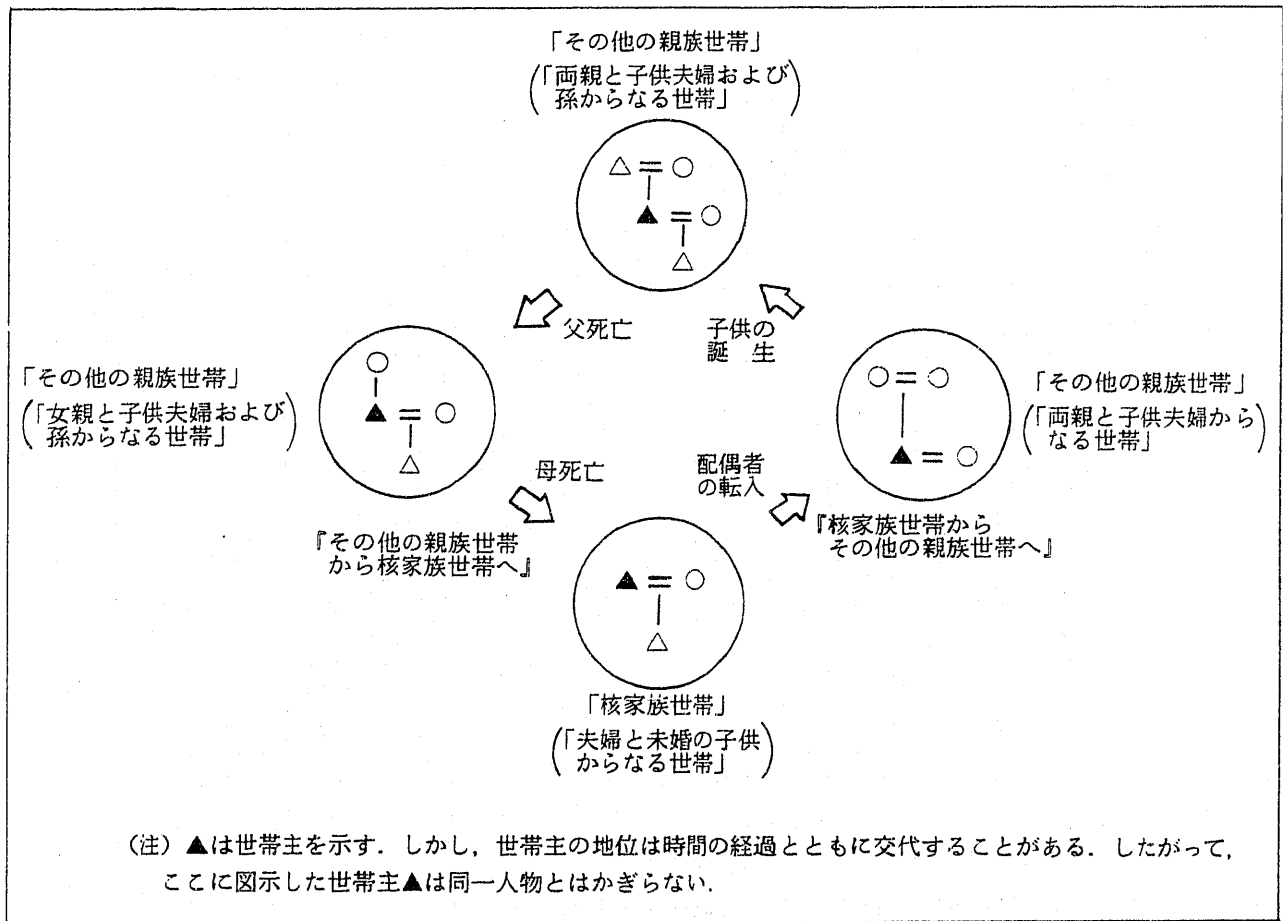
5. むすびにかえて

これらの結果をみると、このムラにおける世帯構成の変化は、世帯主の世代的状況と人口学的要因との関連によって生じたものであり、時間的・歴史的な条件が変動過程に影響を与えたとはいえないように思われる。

しかし、このような状況は、「直系家族制」が維持・存続している社会においてのみ成立しうるものであるといえよう⁴⁾。

ともあれ、このムラにおける世帯構成の変動過程を図式化すると、つぎのようになるのではなからうか⁵⁾(図2 および付表参照)。

図2 安楽城ムラにおける世帯構成の基本的な変動過程の模式図(昭和30~60年)



4) この点については、清水浩昭，前掲（注1），「人口変動と世帯構成の変化」、『人口問題研究』，第185号，p. 16を参照されたい。
 5) この点については、小山隆，「家族形態の周期的変化」，喜多野清一・岡田謙編，『家—その構造分析—』，創文社，1959年，pp.41-65を参考にした。

付表 年次別世帯別世帯構成の変化一覧

世帯番号	101	102	103	104	105	106	107	108	109	111	112	114	115	116	117	118	119	201	
年次																			
昭和30年	/	6	/	6	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	2	2	6	
31	/	6	/	6	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	2	2	6	
32	/	6	/	6	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	2	2	6	
33	/	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	2	2	6	
34	/	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	2	2	6	
35	/	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	2	2	6	
36	/	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	2	2	6	
37	/	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	2	6	6	2	2	6	
38	/	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	2	6	2	2	2	6	
39	2	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	2	6	2	2	2	6	
40	2	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	2	6	2	6	2	6	
41	2	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	2	6	6	6	6	2	6
42	2	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	2	6	6	6	6	2	6
43	2	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	2	6	6	6	6	2	6
44	2	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	2	6	2	6	6	2	6
45	2	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	2	6	2	6	6	2	6
46	2	6	2	6	6	6	1	6	6	6	6	6	2	6	2	6	6	2	6
47	2	6	2	6	6	6	1	6	6	6	6	6	2	6	2	6	6	2	2
48	2	6	2	6	6	6	1	2	6	6	6	6	2	6	2	6	6	2	2
49	2	6	2	6	6	6	1	6	6	6	6	6	2	6	2	6	6	1	2
50	2	6	2	6	6	6	1	6	6	6	6	6	1	6	2	6	6	1	2
51	2	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	1	6	2	6	6	1	2
52	2	6	2	6	6	6	2	6	6	6	6	6	1	6	2	6	6	1	2
53	2	6	2	6	6	6	1	6	6	6	6	6	2	6	2	6	6	1	6
54	2	6	2	6	6	6	1	6	6	6	6	2	2	6	2	6	6	1	6
55	2	6	2	6	6	6	1	6	6	6	6	2	2	6	6	6	6	1	6
56	2	6	6	6	6	6	1	6	6	6	6	2	6	6	6	6	6	1	6
57	2	6	6	6	6	6	1	6	6	6	6	2	6	6	6	6	6	1	6
58	2	6	6	6	6	6	1	6	6	6	6	2	6	6	6	6	6	1	6
59	2	6	6	6	6	6	1	6	6	6	6	2	6	6	6	6	6	1	6
60	2	6	6	6	6	6	1	6	6	6	6	2	6	6	6	6	6	1	6

注) 昭和30～59年は12月31日現在, 昭和60年は調査時点現在とした。/は世帯が存在しなかったことを, 数字は世帯構成を示す。

- 世帯構成は, 1.「夫婦のみの世帯」, 2.「夫婦と未婚の子供からなる世帯」, 3.「男親と未婚の子供からなる世帯」, 4.「女親と未婚の子供からなる世帯」, 5.「単独世帯」, 6.「その他の親族世帯」とした。

202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	221	222
2	6	6	6	6	6	6	6	6	4	6	6	6	6	6	6	6	6	6	4
2	6	6	6	6	6	6	6	6	4	6	6	6	6	6	6	6	6	6	4
2	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	4
2	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	4
2	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	4
2	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
2	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	2	6	6
2	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	2	6	6
3	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	2	6	6
3	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	2	6	6
3	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	2	6	6
3	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	2	6	6
3	6	6	6	6	6	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
3	6	2	6	6	6	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	2	6	6	6
3	6	2	6	6	6	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	2	6	6	6
3	6	2	6	6	2	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	2	6	6	6
3	6	2	6	6	2	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	2	6	6	6
3	6	2	6	6	2	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	2	6	6	6
3	6	2	6	6	2	6	6	2	6	2	6	6	6	6	6	2	6	6	6
3	6	2	6	6	2	6	6	2	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	6
3	2	2	6	6	2	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
3	2	2	6	6	2	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
3	2	6	6	6	2	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
3	2	6	6	6	1	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
3	2	6	6	6	1	6	6	2	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
3	2	6	6	6	1	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
3	2	6	6	6	1	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
3	2	6	6	6	1	6	1	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
5	2	6	6	6	1	6	1	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6